

◇ 木野雅之 (ヴァイオリン) Masayuki Kino, Violin

桐朋学園を経て、1982年ロンドンのギルドホール音楽院に学び、名匠イフラー・ニーマン教授に師事する。音楽院卒業後、ナタン・ミルシュタイン、ルッジエーロ・リッチ、イヴリー・ギトリス等3人の巨匠に師事し研鑽を積む。1984年、ロンドンで開催されたカール・フレッシュ国際ヴァイオリン・コンクールや、85年パリでのメニューン国際コンクールで、サロン音楽特別賞を受賞、87年には『ロイヤルオーケストラ協会シルバーメダル』(英国)を授与されロンドン記念演奏会を行った。

英国を拠点にコンサート活動を行っており、ロイヤル・フィル、ベルリン響、ポーランド国立放送響、モスクワ放送響など数多くのオーケストラと共演。また、サンレモ、オールドバラ等国際音楽祭への参加も多く、RTSI(スイス)のテレビ・ラジオに出演、海外での活躍もさかんに行われている。名古屋フィルハーモニー交響楽団のコンサートマスターを経て、93年4月より日本フィルハーモニー交響楽団のコンサートマスターに、02年7月よりソロ・コンサートマスターに就任。

2001年にチェンバー・オーケストラによるコンサート「パガニーニの魅力」を開催、テレビ朝日ブロードバンド・ライブサイトにて放映された。2003年パガニーニ奇想曲第25番「別れの奇想曲」を日本初演及び録音、7月にはフランス・カシス音楽祭にてイヴリー・ギトリス、ルッジエーロ・リッチ、マルタ・アルゲリッチと共演。

オクタヴィア、サウンド&ミュージック クリエーション他より多数のCD、DVDが発売されており、いずれも高い評価を得ている。

2013年より東京音楽大学教授に就任。また桐朋学園大学、武蔵野音楽大学にても後進の指導にあたっている。

使用楽器は恩師ルッジエーロ・リッチから譲り受けた1776年製ロレンツォ・ストリオーニ。

◇ 藤本史子 (ピアノ) Fumiko Fujimoto, Piano

九州女学院高校(現ルーテル学院)を経て、国立音楽大学ピアノ科卒業。ピアノを吉川由三子、小池和子の両氏に師事。これまでに、幾多の音楽コンクールで入賞し、2008年、国際ピアノ伴奏コンクール優勝。2009年、日本ピアノ歌曲伴奏コンクール優勝。

2006年、スイスレンク国際音楽アカデミーにて、ソロ、室内楽をアドリアン・コックスに師事し、デュオで共演。〈エネルギーシユな推進力にみなぎり、レンジの広い、デュナーミク、表情豊かに歌うフレーズ等、コックスと一体となった起伏が、まさに表現を実現させていた〉(ムジカノーバより)と好評を博す。

NHK交響楽団、九州交響楽団のコンサートマスターや首席、次席奏者、東京ベートーヴェンカルテット、U. ダンホーファー(vn)、A. スコッチチ(vc)、R. ラッコ(vc)、D. タラス(cl)、ウィーンラズモフスキー四重奏団をはじめとする、国内外の著名な演奏家や声楽家と共演中。

現在、フリーのピアニストとして、室内楽、伴奏法を上田晴子氏に師事しつつ、主に日本フィルハーモニー交響楽団ソロ・コンサートマスター木野雅之氏、九州交響楽団首席コントラバス奏者深澤功氏の伴奏者として全国各地で活躍しており、両氏とのCD、DVDもリリース。又、スコットランドDG地球救援音楽祭、球磨川音楽祭、みおつくし音楽祭、八女おりなす音楽祭等にも出演。様々なジャンルのコンサートを企画、出演し積極的に活動中。

◆ プログラム・ノート

■ ヴィタリー: シャコンヌ ト短調



トマゾ・アントニオ・ヴィタリー(1663-1745)はイタリア・ボローニャに生まれ、ヴァイオリニストとして活躍した。作曲家としてはバロック様式の室内楽曲を残しており、この「ヴァイオリンと通奏低音のためのシャコンヌ」が最も有名。曲はメンデルスゾーンが自身のヴァイオリン協奏曲の初演を委ねたことでも知られる19世紀のヴァイオリニストF. ダーヴィットの紹介により有名になったが、ヴィタリーのものとする楽譜が残っておらず、別人による作品との説もある。冒頭にピアノで奏される主題が、あらゆる技巧を駆使したヴァイオリンによって華やかに変奏される。

■ グリーグ: ヴァイオリン・ソナタ第3番 ハ短調 Op.45



1. アレグロ・モルト・エド・アパシオナート
2. アレグレット・エスプレッシヴォ・アラ・ロマンツァ
3. アレグロ・アニマート
組曲「ペール・ギュント」やピアノ協奏曲短調などの作品で知られるノルウェーの作曲家、エドヴァルド・グリーグ(1843-1907)は生涯に3曲のヴァイオリン・ソナタを書いているが、この第3番は最も人気が高く、演奏される機会も多い。作曲当時、グリーグが住んでいたベルゲン近郊のトロール・ハウゲン(妖精の丘)を訪ねてきたイタリアの女流ヴァイオリニスト、テレジーナ・トゥアのために書かれた作品といわれている。高度なヴァイオリンの技巧を駆使しながら、北歐の民族色を湛えた美しい旋律が印象的な薫り高い名作として知られる。

■ ブラームス: スケルツォ 《F. A. E ソナタ》より



ヴァイオリンとピアノのための《F. A. E ソナタ》は、シューマンとその友人ディートリヒ、それにブラームスの合作により1853年に書かれた珍しい曲。第1楽章はディートリヒ、第2楽章と第4楽章はシューマン、第3楽章のスケルツォが当時20歳のブラームスの作曲で、3人の共通の友人であるヴァイオリニストのヨーゼフ・ヨアヒムに献呈されている。曲名のF. A. E はヨアヒムのモットーである「自由だが孤独に」(Frei aber einsam)の頭文字から取ったもので、さらにドイツ音名のF・A・Eの音列が曲のモチーフになっている。現在はブラームスが作曲したスケルツォのみが演奏されることが多い。

■ ショーソン: 詩曲 Op.25



ドビュッシーやラベルの印象主義音楽の先駆者といわれながら、若くして(44歳)不慮の事故によりこの世を去ったフランスの作曲家、エルネスト・ショーソン(1855-1899)の傑作にして代表作。他に類をみない独特の美的感覚と憂鬱感を湛えたこの美しく神秘的な作品は、当初、知己のあったロシアの文豪トルゲネフの小説「勝ち誇れる愛の歌」に想を得て書き始められたが、やがて物語には依存しない純粋な器楽作品として構想が進められ完成された。ウジェーヌ・イザイの独奏によりフランス北部のナンシーで初演されている。

■ サラサーテ: 序奏とタランテラ



スペインに生まれ、幼少時から楽才を発揮したパブロ・デ・サラサーテ(1844-1908)は、8歳でデビュー、10歳でマドリドの宮廷で演奏し、女王からストラディヴァリの名器を与えられた。その天才的な演奏にインスピレーションを受けた作曲家は多く、ブルッフの「スコットランド幻想曲」やラロの「スペイン交響曲」は彼のために書かれたもの。また自身もヴァイオリンの名曲を数多く作っている。この「序奏とタランテラ」は、息の長い旋律を歌う序奏部に始まり、後半は高度な演奏技巧が要求されるタランテラ(イタリア起源の急速で激しい舞曲)が繰り広げられる。

■ ヴュータン: 夢



アンリ・ヴュータン(1820-1881)は、ベルギーに生まれ6歳で演奏会デビュー、ヴィルトゥオーゾヴァイオリニストとしてヨーロッパ各地で華々しく活躍した。そのかわら作曲家としても活動し、その作品は拠点としていたパリ音楽界のみならず、ロシア帝国やアメリカ合衆国でも絶賛された。ロシアやベルギーでは教鞭をとり、ウジェーヌ・イザイなどの逸材を輩出している。「夢」は6つのサロン風小品Op.22の3曲目。華麗な技巧とロマンティックな旋律の両方が楽しめる佳作。

■ サラサーテ: ツィゴイネルワイゼン

サラサーテは自身が超絶技巧のヴァイオリニストとして活躍しただけに、ヴァイオリンの技巧が最大限に発揮される作品を数多く残している。現在でも極めて人気が高いのがこのツィゴイネルワイゼン。「ツィゴイネル」とはドイツ語でジプシー、「ワイゼン」は歌の意。当時流行していたハンガリー音楽風のジプシー・ヴァイオリンの手法を用い、情熱的で哀愁を帯びた第1部、甘美で叙情的な第2部、そして華麗かつ急速、情熱ほとばしる技巧的な第3部の3つのパートから出来ている。